

## エクリチュールの声

中島摩耶

本研究の目的は、美術作品における言語的記述と制作主体との関係を再考し、描画・記述・発話といった異なる表現行為において、ひとつの身体に複数の主体性が生成しうる可能性を探究することにある。とりわけ、制作行為を通して現れる言葉のあり方に注目し、作品の形成とともに立ち上がる複数の主体性を「声」として捉えることを試みる。

ウィトゲンシュタインは『論理哲学論考』(1922)において、「語りえぬものについては、沈黙しなければならない」と述べた。言語は世界を写し取る論理的な像であるが、わたしたちはその論理的基盤そのものを言語内部で表すことはできない。なぜなら、その基盤を説明しようとするたびに登場する新たな言語の基盤が、再び宙吊りにされるからである。したがって、語りえぬものは語りの外に沈黙として残されることになる。一方、後期の『哲学探究』(1953)においては、言葉の意味をその使用に見出し、言語を実践的な営みとして捉え直している。この転換によって、言語はもはや単なる論理的構造ではなく、他者との関係や社会的文脈のなかで意味を生成する行為として理解されるようになった。

このような言葉の関係的な性質は、自己を語る行為にも深く関わっているといえる。わたしたちが自分自身について語るとき、その語りはすでに他者的な言語体系を媒介しており、言葉は自己の内から純粹に発せられるものではない。言語表現の背後にはつねに匿名的な空白が潜み、主体は自らの言葉においても揺らぎを抱えているのである。本研究は、この言語表現における「主体の匿名的な空白」を中心的な主題とし、表現行為における主体の不安定性やその所在をより理論的に捉える枠組みとして、デリダおよびブランショのエクリチュール論を参照する。エクリチュールとは一般的に「書くこと」を意味するが、それは単なる記述行為ではなく、言葉の匿名性を内包し、誰のものでもない非人称的な「声」を立ち上げる表現行為として理解される。書かれた言葉はもはや書き手に属さず、むしろ作者の不在を前提とする地点から発せられるのである。ここで、本研究ではこのような言葉の背後に生じる空白を指し示すために「ヌル(∅)」という概念を導入する。ヌル(null)とは、プログラミング言語において「値のない状態」を表す語であるが、ここでは言葉を可能にしながらもそれを欠如として示す他者性のしるしとして位置づける。すなわち、ヌル(∅)は語りの構造に潜む主体の空洞を示す概念である。

本論では、これらの枠組みをもとに筆者自身の制作実践を分析し、ヌル(∅)が表現行為にいかに関与するかを考察した。作品制作は、エクリチュールと同様に作者の不在をもたらしと同時に匿名的な主体を立ち上げる行為であるといえる。西田幾多郎の「場所の論理」を援用し、この不在を、主体と客体を超えた〈場〉の次元として捉え直すことで、作品が作者と世界との相互関係の交点として成立しうることを提示した。制作とは、単に作家の意図を形象化する過程ではなく、関係的な場のなかで主体が現れ続ける運動である。しかし、その背後にはつねに言語化し得ない空白が残る。この欠如を埋めようとする欲望こそが表現行為を駆動する根源的な契機であり、ヌル(∅)は欠如であると同時に表現生成の原点として働くことが明らかとなった。

そしてこれらの考察をふまえ、ヌル(∅)を抱えた表現のあり方そのものを描写するために、本論では「M」という仮構の語り手を導入した。これは、作品に現れる主体を「声」として立ち上げる試みである。Mは内部にヌル(∅)を抱えており、自らの作品や自己について語ろうと試みながらも、その主体性が常に語りの途上で揺らぐ存在として設定されている。そのため本論は対話形式を用い、複数の語り手がMと言葉を交わす構成を採用した。この形式は、線的で自己完結的な語りを意図的に回避し、Mの言葉が他者との相互作用のなかで展開していく過程を可視化する試みである。さらに本文全体においては、対話文に加えて論考やモノログなどを断片的に配置し、複数の語りが交差する編み目のなかにヌル(∅)を浮かび上がらせる構成を展開した。このような断片形式はMの主体的意識を分散させると同時に、言葉同士が交差する場を形成し、直接的には捉えられないヌル(∅)を関係の網の目のなかに浮かび上がらせるものとして機能するのである。

以上の考察を通じて、本論ではエクリチュールにおける匿名的な「声」の成立と作品制作において新たに立ち上がる主体との関係を、ヌル(∅)という空白を媒介とした関係的構造として提示した。本研究は、言葉と作品の双方において主体がいかに関わり立ち上がるかを明らかにし、思考と制作の往還を通して、語りえぬものに触れ続けるあり方を作品表現として位置付けるものである。